

## 寄稿

## 太平洋で撃沈された漁業調査船「但馬丸」と生還された船長の手記

廣瀬和孝<sup>a\*</sup>

Fisheries research vessel “Tajima-maru” sunk in the Word War II and a note by the captain returned alive from the vessel.

Kazutaka HIROSE\*

キーワード：漁業調査船，但馬丸，第二次世界大戦，徴用，撃沈

兵庫県日本海における漁業調査船（当時は漁業試験船）「但馬丸」が，第二次世界大戦において海軍に徴用され，太平洋上で撃沈されたことは，「兵庫県における水産試験研究75年の歩み」（兵庫県立水産試験場1999）に記されているが，詳細は明らかでない。

戦時中の報道管制が厳しい中で，あまり知られることのなかった但馬丸撃沈の状況を後世に伝えるため，救助された篠原常吉船長の手記や，当時の写真等を本稿に取りまとめた。また，写真整理の過程で明らかになった但馬丸の救命浮環についても，若干の考察を加えて記録した。

## 「但馬丸」の概要

但馬丸は，兵庫県日本海における初代漁業調査船として，1929年（昭和4年）に，神戸市の株式会社川崎造船所で建造された。同船の概要は，第1表に示すとおりである。

第1表 但馬丸の主要項目

船質	総トン数	機関種類	出力	速力	長さ	幅	深さ
鋼	89.8トン	ディーゼル	185馬力	9ノット	25.4m	5.2m	2.2m

## 撃沈に至る「但馬丸」の行動

後掲する篠原常吉船長の手記によると，但馬丸が海軍に徴用され，津居山港を出航したのは，1944年（昭和19年）3月2日のことで，同年5月5日の撃沈に至る経過は，第2表のとおりである。

## 撃沈後の船長の動き

但馬丸の撃沈で海に投げ出された篠原常吉船長は米軍に救助され，約2年半後の1946年10月30日，無事日本に帰還した。この間の船長の足取りは，第3表に示すとおりである。船員11名，兵員14人のうち，救助されたのは船長を含めて船員3名，兵員1名だけであったと思われる。

## 但馬丸乗組員

兵庫県企画県民部文書課歴史資料係に保管されて

\*Tel: 0796-36-0395. Fax: 0796-36-3684. Email: kazutaka\_hirose01@pref.hyogo.lg.jp

兵庫県立農林水産技術総合センター但馬水産技術センター（669-6541 兵庫県美方郡香美町香住区境1126-5）

<sup>a</sup> 現所属：兵庫県農政環境部農林水産局水産課（650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5-10-1）

第2表 但馬丸の航海状況（篠原常吉船長の手記等による）

1944年3月2日 (昭和19年)		海軍に徴用され津居山港を出航 舞鶴軍港を経て横須賀港へ廻航，待機
4月17日		船長 鎮守府司令部へ出仕 大鳥島（ウエーキ島）行きを命ぜられる。
21日		大鳥島（ウエーキ島）への物資等運搬準備完了
22日		船員11名，兵員14名，計25名で横須賀港を出港
25日	朝	小笠原諸島 父島に入港
26日	14:00	父島を出港，大鳥島（ウエーキ島）へ向かう。
5月3日	21:00	敵に情報が漏れたとして帰投命令を受ける。
5日	7:00	アメリカ軍の潜水艦2隻と戦闘に入り被弾，撃沈される。

第3表 但馬丸船長復員までの状況（篠原常吉船長の手記等による）

1944年5月6日	ミッドウェー？に入港，診察を受けた後ハワイに向かう。
	4日位後ハワイ真珠湾に入港，2ヶ月入院。 他の3人は捕虜収容所に収容
7月中旬	退院，捕虜収容所に入所，6日間尋問を受ける。
8月上旬	ホノルルを出港，10日位でシアトルに入港 汽車で3日間南下してオークランドで下車 連絡船で金門橋の下を抜け，エンゼル島に上陸 3回の取り調べを受ける。
9月中旬	オークランドで汽車に乗り，ウィスコンシン州捕虜収容所へ
1945年8月15日	終戦
9月中旬	カリフォルニア州ココラン？に移動，綿摘み作業
1946年1月6日	トラックで移動しロサンゼルス近くで乗船
1月中旬	ハワイへ入港，捕虜収容所へ入所
10月中旬	ホノルル港外の岸壁から出港
10月30日	浦賀に上陸し，復員する

第4表 但馬丸乗組員（兵庫縣職員録 昭和18年7月1日現在）

水産試験場 但馬丸事務所 城崎郡港村役場（津居山7）	
船長	篠原 常吉
機関士	住川 勘一
通信士	白藤 忠男

いた、昭和18年の兵庫縣職員録（兵庫県 1943）により、第4表に掲げる幹部乗組員3名が明らかになったが、17名とされる乗組員のうち、撃沈された際に誰が乗り組んでいて誰が助かったのか等、篠原船長以外の消息は明らかではない。

#### 篠原常吉船長の手記（全文）

但馬丸撃沈の状況について、篠原常吉船長が、旧浜坂町の老人大学（現新温泉町立高齢者大学）「宇都野学園」の随想集に投稿した手記は、以下に示すとおりである。手記の中で「2年後に33回忌を迎える」と記してあるとおり、「宇都野学園」が設立された1973年（昭和48年）、篠原船長が72歳の時に書かれたものである（篠原 1973）。手記の中で、漢数字を算用数字にした以外は、なるべく原文に近い形とした。ご遺族の承諾を得て撮影した同船長の遺影と、但馬丸の全景写真を第1図に示す。

#### 死線を越えて

篠原 常吉

大東亜戦争もアメリカ軍の大反攻作戦で、南方の島々が玉砕の悲報相次ぐ昭和19年3月2日、私が船長として乗り組む但馬丸（兵庫縣水産試験船）も海軍に懲用され、津居山港を出港し、舞鶴軍港を経て横須賀港に廻航した。横須賀では待機せよとのことで、ただ軍装備をするだけで、北か南か、行く先は不明であった。

4月17日、鎮守府司令部より出仕を命ぜられ、参謀大佐、中佐、私と3人で密議を開いた。参謀いわく、「本日軍司令部より命令あり、現在横須賀に待機中の監視船三百隻の中より、もっとも優秀なる船を一隻選べとのことで、該当する船は但馬丸である。ご苦労だが心身の準備をしてほしい。行く先は大鳥島（ウエーキ島）、目的は暗号書、外重要書類、その他弾薬、慰問品、薬品等を届けるため。然しすべての物資が不足しているので、積めるだけ満載せよ。燃料を含む積込品は軍需部に連絡する。積載完了は21日午後8時までに報告されたい。」

命令により翌日積込みを開始したが、何処に行っても同情的で、気の毒がられているような感じがした。船員の中で、身体の悪いような者は海軍病院で診察を受けさせ、その中2人は但馬に帰らせた。

4月21日午後9時、積荷完了報告のため司令部を訪れた。燈火管制下の薄暗い室内には、参謀二人が待ちわびていた。出港準備完了を報告すると、大佐は私に握手、中佐は肩に手をのせて、「陛下のため、国のためにたのみます。」とやさしい言葉をかけてくれた。命令書を開けてみると、4月22日午前8時、横須賀出港、小笠原、父島を経て迂回航路を取り、5月9日大鳥島に着く予定となっていた。航海日誌に記入してみると、シニニクとなるので、非常に気にかかった。夜が明けると、士官を含む兵員14名が乗船し、船員11名の計25名となった。午前8時、但馬丸はひっそりと岸壁を離れ、針路を南に取り、小笠原に向う。晴れた空に富士山がよく見える。南下するにつれて、よく見えていた山々も次第に水平線上低くなり、これが母国の見納めかと思えば胸がこみ上げてくる。25日朝、父島に入港。爆雷四個の安全装置を解く。指揮官同伴で小笠原司令官と打ち合わせをしたが、戦況は我が軍に不利な油断の出来ない状態であった。26日午後2時、父島を出航、東への針路を取る。南の海上はおだやかで船は何事もなく航走し、船員は故郷の話に夢中であった。航路はすべて大鳥司令官の



第1図 篠原常吉船長と但馬丸

指示によって定められており、無電は毎日午前8時、午後9時の2回聴取するのみで、発信は禁じられていた。

5月3日午後9時、大鳥司令官より入電あり、「私の指示せる航路は、敵に察知されたるやも知れず。適宜航路を取り帰投せよ。」この情報により万策尽き、大鳥島北方200海里の地点より針路を南に転針、南下した。5月5日午前7時、天体観測により船位を測定、見張員3名の部署に行き、「長い間ご苦勞であった。明朝5時には大鳥島に入港出来る。後僅かの間頑張ってくれよ。」と、申し送りを依頼し、士官室に入って数分後、「潜水艦が見えます。」と、大声が聞こえた。「どちらか。」「船尾の方です。」直ちに飛び出して見れば、左舷後方1,500メートル位に、敵大型潜水艦が浮上しつつある。「戦闘配置につけ。」指揮官の声が聞こえる。直ちに戦闘開始、たちまち3門の機銃は敵艦めがけて火を吹いた。私は早速操舵に就き、全速力にした。ふと後方を見ると、白線一筋船尾に迫る。魚雷だ。直感して取舵一杯、運よく船すれすれにかわし、針路を元にもどした瞬間、前方に更に別の潜水艦がまた1隻浮上して来た。

私はもはや最後と、かねて指令を受けていた暗号

用文により、船位と、「敵潜2隻と交戦中。」の電文を打たせた。船側には敵砲弾の水柱があがり曳光弾の弾着と、本船の機銃音がガンガン鳴り響く。ふと船側を見ると、泡のかわりが遅い。おかしいと思い、伝声管で、「全速だがどうしたか。」と、大声で言うと、「もういけません。」と、言っている。私は直ぐ船橋を飛び降りて機関室をのぞいたが、船室下より海水が渦を巻いて侵入しており、空気バルブから入る水で、エンジンの回転は次第に落ちてゆく。所謂すべ無し、全員上れを命じ、船橋にもどった。愈々最後の処置をと、手持ちの暗号書、機密書類、海図等、兼ねて備えていた鉄筒に入れ、海中に投げ入れたその瞬間、船橋の後方に砲弾が命中、私は前に叩きつけられ、内張板の破片に包まれた。その直後、機関部員3名が上って来て、引きずり出してくれた。甲板には司令部宛の暗号書、重要書類等を入れた箱が4箱あり、この箱は、事情の如何を問わず、絶対敵に渡すような事があってはならぬと命令を受けていたので、4個の箱をロープで連結し、尚それを1門の山砲にくくりつけ、万一の場合は海中に、投下するよう係員も定めていたが、誰も居なかった。私はそれを早く投げ込むよう言ったが、山砲が重くてなかなか動かない、そのうち

船尾から急速に沈没し始めた。

私はそのロープを握ったまま、「美恵乃、後の子供を頼む。」と、沈んでいった。苦しまぎれにロープを離し、手足をもがいているうちに浮上してしまった。溺れるものは藁もつかむとか、浮流物が沢山あったが、すぐ傍に蒸留水1升瓶を入れた箱が浮いており、その箱の縄に左手をかけていた。海上は何事も無かった如く平穏である。2隻の潜水艦は、私の方へ30メートル近くまで寄って来た。甲板上がってきた兵2人がこちらに銃口を向けている。しばらく様子を見てみると、15人位が一行に並び、私を見つめていた。そのうち中央の1人が投縄を投げ、これにつかまれと盛んに合図する。わたしは捕虜となり、はずかしい思いを残すより、死なねばならぬと箱の縄をつかんだまま、左足で泳ぎながら必死で逃げた。苦しいままに振り返って見ると、敵兵はゴムボートを降し、浮流物を拾っている。私は幾度も潜り海水を呑み込んだが、苦しいばかりである。ふと箱をよく見ると、一方の縄が切れ、3cm位の釘がついた木片があった。その木片をもぎり取り、釘を喉元に突き刺した。血はほとばしり、手足の先からしびれてきた。

ふと気が付いてみると、ドドドドと振動している。ハテ、私は海に沈んだはずだが、もしかしたら、捕虜になったのではないかな？ 見ようとしても眼は見えない。右手を上げようとしても動かない。ハワユ、ハワユの声が聞え、腹をさすっている。左手を上げようすると、誰かが支えてくれる。顔に手をあてると包帯をされており、静かにその包帯を解き、右眼を開けてくれた。尻に注射をしているのかヒリヒリする。よく見ると、紅顔の敵兵4、5人が盛んにハワユをとなえ、薬、水等を口に入れようとしている。右手、右足は副木包帯され、海水を多量に飲んでいたので、腹を押さえるようにしてシビンを当てていた。3日位してよく気をつけて見ると、私を中央の寝台に寝かせ、衛生士官は下に毛布を敷いて寝て居り、4、5人の兵が交替で看護についており、又手の包帯は艦長

自ら1日おきに交換してくれた。場所は艦尾で魚雷発射管が四門あり、その下に救助された船員2人、兵1人が座り、1人の士官が拾い上げた英語辞典を持って、私の方を指差し、何かと話していた。そして船員を通じて、薬を飲み、水を飲めとすすめ、無理に私の口を開け、きゅうすで水を注入したので、私も喉が乾いており、思わず呑み込むと、彼等は拍手して喜んだ。食事はどんなご馳走でもするから食べよと、すすめていた。枕辺には、新しいスリッパ、ランニングシャツ、彼等の妻が送ってくれたと言って菓子、煙草等、中には妻の写真まで見てくれと、見舞い品を積み重ねた。

翌日、ある島に入港、多分ミッドウェーと思われた。間もなく通訳が病院長を連れて来て、「この艦はハワイ迄行くのだが、艦長があなたの症状を心配しておりますので、これから診察します。」と、ていねいに診てくれ、終わった後更に通訳は、「今院長が診たところでは、あなたは気分元気になって居りますから、ハワイ迄行ってもらいます。」とのことで、その後4日間くらいで真珠湾に入港した。ここで病院車で入院、他の3人は捕虜収容所へと別れた。病院に入ってから直ぐに通訳が来て、「日本では捕虜になると虐殺されると言っているし、アメリカでも、又他の国でもそのような事を言っている。然し、1928年のゼネバ会議において、各主要国が参加し、捕虜規定を設け、捕虜はその国の軍隊と同じ待遇を受けることになっている。日本は捕虜はないとして参加しなかったが、オブザーバーとして来て居たので、認めても同じだ。戦争も後1年半程で終るから、終われば日本に帰れる。早く健康な身体となって、規定を守り、皆の者と行動を共にしなさい。」と、言って帰った。

2ヶ月程の入院中は、毎週教戒師のような士官が来て、慰めの言葉を解いていた。食事はアメリカ兵と同様で、差別はなく、マキン、タラワの戦争で重傷し、捕虜となった若い人が二人居て、英語を勉強し、簡単な通訳が出来るので別に不自由はなかった。番兵は

なかなか厳重で、夜でも何回となく見廻りし、朝洗顔、便所に行くときでも先導して、釘1本落ちていても拾い、棚等にカミソリ刃が残っていないか、よく調べた後でないと思わせないし、責任感が強いと思った。

7月中旬、退院して一般捕虜収容所に入所したが、別に定まった仕事はなく、時折順番に仕事に出たりした。手当は各人1日10セント、仕事に出た日は別に70セントを受け取った。ハワイは邦人が多いので邦人新聞も読め、又、碁、将棋等の娯楽は十分であり、中には土俵を作り、角力を取る人も居て、アメリカ兵も仲間に加わるのが居た。私は6日間尋問を受けたが、暑いからと午前中3時間位で、その都度、私が知っているようなことは、アメリカ軍は知っているだろうと言えば、彼等は、「たとえわかっていることでも、私はそれが仕事だから返事して下さい。」と、言っていた。

昭和19年8月上旬、200人がホノルルで行く先わからぬ3,000噸位の汽船に乗船した。私もその中に加わって居り、10日位でシアトルに入港し、上陸後検疫所で入浴、検疫を受け、更に汽車で3日間かかって南下し、金門湾に面したオークランドの駅に下車、そこから連絡船に乗り、金門橋の下を通り抜け、エンゼル島に上陸した。この島は兵団基地で、街のような所はなかった。ここでも別に作業は無く、体操は日課で、他に衛生、掃除が主であったが、4、5人ずつに別れて取調べを受けるため、5日間を赤レンガの建物の一室に閉じ込められ、小用するのも外から鍵を開けてもらう不便さで、トラブルがあった。取調官は、大阪、名古屋に居たというアメリカ人で、3回あった取調中、大阪、名古屋が爆撃でどう変ったか、被害はどうか位のことであった。只1人の2世下士官が調べにあたり、「お前の船が舞鶴に行ったのは何日か、針路は何処を指していたか、東舞鶴駅から海兵団に行く道は舗装か、砂利道か。」と、聞かれたので、私は

は見えていなかった。又バスに乗ったことはあるが、道のことまではわからなかった。湾には軍艦は殆ど見えなかった。」と、返事したら、「お前はかくしている、そんなことがわからないはずはない。」と、怒ってきたので、私もむっとして、「アメリカの通訳官は同じ質問でも、あなたとか、知らぬことは止むを得んが、知っていることは返事して下さいと、ていねいな言葉を使っているのに、君は反対ではないか。君は2世か3世か知らんが、元は日本人の同じ血の流れではないか。本来なれば君の方が捕虜に対し親切に扱い、同情してやるのが当然だ。君にはもう何を聞かれても返事をしない。」と、言うてから態度が軟化してきて、「何かほしいものはないか、不自由はしてはいないか。」等と、聞くようになった。

昭和19年9月中旬、約200名程が集結して、オークランドで汽車に乗り、ウィスコンシン州捕虜収容所に入った。ここでは大隊編成として、3ヶ中隊に分れ、第1中隊約200名を軍属、地方人とし、第2、第3中隊を現役軍人とした。宿舎は中隊に4棟あり、1棟を小隊として50名入り、各1人ずつの寝台で棚、手箱があり、被服も整頓するようになっていた。作業の殆んどは外部で、各所に配布されるが、各中隊毎に班長を決めてあり、午前7時に開門して全中隊整列して出て行き、各分野に分れて作業場に行くようになっていた。午後は5時作業終了、帰隊するようになっていた。食事は朝はパン、りんご、卵1個に果物として乾ぶどう、昼食弁当はパン5枚に、ハム、チーズをはさんであった。夕食は米飯に肉、サラダのようなもので、食堂で食べるようになっており、料理人は各中隊から選んで出していた。又この収容所では酒保があって、日用品、煙草、ビール小瓶を日曜日以外は売っていた。ビール小瓶1本10セント、煙草1箱5セントであった。手当の10セントは全員に出ていたが、作業に出た人は70セントの計80セントになるので、作業に出られない人が気の毒で、煙草代等は与えていたし、生活としては不自由はなかった。

昭和20年8月の終戦後は、日本に捕虜になっていたアメリカ兵が帰国して、この収容所に視察に来るようになってから待遇が逆転した。食事も半減され、酒保も廃止され、不自由となったが、邦人の方々から米、味噌、醤油等を送っていただいたりして、幾分補いがつき嬉しかった。9月中旬、カリフォルニア州のココーランという町に移動、綿摘み作業をして、昭和21年1月6日からトラックで移動を始め、大油田を通り抜け、ロサンゼルス近くで乗船して、1月中旬にハワイに降り、真珠湾が一目で見渡せる高原地帯の捕虜収容所に入った。アメリカに来ている日本捕虜の数は約1万と聞いていたが、真実はわからない。生活、作業内容はほぼ今迄と同じであったが、邦人が多いので慰問に来てくれたり、私たちが種々工夫をこらし、衣装を作り、日曜日は休みであったので、殆んど毎週演芸会を開いたりした。又食糧が少ないことがわかっていたので、邦人の奥様方が、ホノルル東部婦人会、ホノルル西部婦人会、と書いたタスキを肩にかけ、自家用車に料理を積込み、各作業場を廻って来るので、何回もご馳走になった。番兵も至極のんびりしていて、作業能力を強制するようなこともなく、昼食前になると皆揃って酒保に行ってしまうので、昼休みはゆっくりできた。番兵に食事の少ないことを話したり、弁当を見せると、「仕事はせんでもよいから気をつけていて、親分(士官)が来た時は仕事をすする真似をしてくれ、そうしないと自分の立場が悪いから、要領よくやってくれ。」と、よく言った。

非常に気にかかったことは、高原地帯で砂糖きび、パイン等の大農場があるが、その付近の作業に行った時、昼休みは番兵が居ないので、数人が砂糖きび畑に入り込み、きびを切り倒し、それを絞って水筒に入れ、又パインも同じく絞って水筒に入れ、持ち帰って酒にするような行為がよくあったが、日本人の悪い習慣で、考え直さねばならぬことであると思った。「日本は戦争に敗れた。皆さんはもう捕虜ではない。日本に帰ってそれぞれの正業に就き、国の再興に努

めなさい。」と、司令官の話があった。10月中旬、ホノルル港外の岸壁で汽船に乗り、10月30日浦賀に上陸、復員した。

私は以上のような経路をたどって、無事に復員したが、但馬丸が舞鶴在泊中、許可を受けて家に帰り、用件をすませて帰船の折、妻は見送りに来ていた大勢の人波の中で卒倒し、永遠の別れとなったので、18歳の長女を頭に下は4歳の娘5人を残して出征したので、大人が居ても困る食糧難を、子供ばかりがどうして生活を切り抜けていることやらと、心配でならなかった。又同じ船で行動を共にした兵員、船員の大部分の方達が不帰の客となられたことを憶う時、誠に申し訳なく、毎年お盆にでもと仏参りさせていただいていたが、ご家族のご辞退により今は止めております。明後年は三十三回忌となりますので、お参りさせていただきたいと存じます。

尚、ある洗濯工場に20名程の人と作業に出ている時、若い主任のアメリカ人が、「リーダー、私の母は日本人で、常に言われていた言葉は、日本人はとても礼儀正しい国民だから、よく気をつけ失礼をしないようにと、言われてきたが、聞くと見るとは大分違うようですね。」と、言った言葉が耳に残っており、現在社会の生き方をそのまま続けていたなら、世界各国から嫌われ者になりはしないかと、憂うばかりです。

### 調査船「但馬丸」の写真

第2図から第5図は、但馬丸であるとして残された写真である。第2図の写真には、「昭和5年7月17日写 宮津行きの際但馬丸乗船者の関係人員」とのメモ書きがある。学童児を含む家族や、船員帽をかぶった学生と思われる人物が写った和やかな写真である。建造翌年に当たる1930年の、夏休みでもない平日(木曜日)にどういう状況で宮津へ行くのか、今となっては知る術もない。後述する篠原敏春氏からの聴き取



第2図 宮津行きの際に撮影した但馬丸乗船者の関係人員(1930年7月17日)



第3図 沿海州における但馬丸 船内漁獲物処理



第4図 但馬丸で採捕されたイシイルカ



第5図 但馬丸の乗組員と思われる13名



りによると、向かって左後方に干してあるのは、いわし網（刺し網の一種）と思われる。

第3図の写真裏面には「沿海州ニ於ケル指導船但馬丸 船内漁獲物処理」と記載されている。写真からの魚種判定は難しいが、当時の事業報告と沿海州での調査体験がある、漁業調査船「たじま」尾崎爲雄船長からの聴き取りによると、トゲガレイ、カラスガレイ（金がれい）等ではないかと推察される。第4図の写真に説明はないが、撮影されているイシイルカは、戦前から戦後にかけて食用とされていたようである。但馬丸でどのようにして採捕したのかは明らかでないが、尾崎爲雄船長からの聴き取りによると、突きん棒ではなかったかと思われる。第5図の写真には、但馬丸の船名とともに乗組員（当時17名）と思われる13名が写っている。右端人物の帽子等の服装から、戦時体制に入ってから写真と思われ、撃沈された際の殉職者が含まれている可能性がある。篠原敏春氏からの聴き取りによると、左から3人目が篠原常吉である。

### 救命浮環についての考察

第2図から第4図の3枚の写真には、但馬丸のブリッジ前面に装備された救命浮環が写っていて、それぞれ次のような特徴がある。第2図においては、救命浮環に漢字で「但」の1文字が見える。第3図に写っている救命浮環には「TAZIMAMARU AKASHI」とローマ字表記されていて、第1図のような「但」の漢字は見当たらない。第4図には、救命浮環のローマ字表記で「じ」をヘボン式の「JI」と表記しているが、第3図では訓令式で「ZI」となっている。近年の船では、救命浮環を取り替えることは滅多にないが、これら3枚の写真が全て但馬丸であるとすれば、ブリッジ前面に装備された救命浮環は少なくとも3種類あったことになる。当時の救命浮環の使用状況や役割がどうだったのか、今後の検証を待ちたい。

### あとがき

篠原常吉船長が戦死したということで、遺族には小石の入った骨箱が届けられていた。手記の中で触れられているとおり、但馬丸が徴用されて間もなく、突然母親に先立たれた5人姉妹の長女美恵乃さん（2010年12月没）は、当時18歳で敏春氏を婿養子に迎えた。そのわずか3ヶ月後に、戦死したはずの篠原船長が突然復員してきて、船長本人も回りも大変な驚きであったそうである。篠原敏春氏からの聴き取りによると、篠原船長はその後、香住水産高等学校（現香住高等学校）の練習船「但州丸」の船長を勤め上げ、92歳まで存命であった。残されていた篠原船長自筆の下書き遺稿には、家族への思いが切々と述べられている部分もあったが、本稿では手記として公表された部分のみを記録するにとどめた。

第二次世界大戦で犠牲となったのは、但馬地域の漁船についても同じであった。香住漁港の一角には、8隻の漁船が徴用されて25名の漁業者が犠牲になった事を記す石碑が建っている。当時として最新鋭の漁船と優秀な漁業者が選ばれたであろう事は、想像に難くない。

2009年（平成21年）7月28日に竣工した新漁業調査船「たじま」（199トン）は、太平洋に消えた初代調査船但馬丸から数えて、5代目となる。我々は建造された最新鋭の真新しい漁業調査船を前にして、この歴史的事実をあらためて思い起こすとともに、連綿と連なる名も知れない数多くの先達を偲び、新たな決意で但馬漁業の発展に尽くしていかなければならない。

2011年2月にお会いする機会を得た娘婿の篠原敏春氏（89歳）には、篠原常吉船長の遺稿や写真資料を見せていただくとともに、本稿の公表について快く了解をいただくことができた。また、漁業調査船「たじま」の尾崎爲雄船長には、写真の解析に際して重要な助言をいただいた。心からお礼申し上げたい。

文 献

兵庫県（1943）兵庫縣職員録（昭和18年7月1日現在）.

兵庫県立水産試験場（1999）兵庫県における水産試験研究75年の歩み, 39.

篠原常吉（1973）老人大学宇都野学園随想集, 老人大学（現新温泉町立高齢者大学）宇都野学園.